法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-27

<文献紹介>ロシア現代史と中央アジア

YAMAMOTO, Shigeru / 山本, 茂

(出版者 / Publisher)
法政大学地理学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理
(巻 / Volume)
30
(開始ページ / Start Page)
53
(終了ページ / End Page)
54
(発行年 / Year)
1999-09-30

【文献紹介】

ロシア現代史と中央アジア

木村英亮（1999）：有信堂（東京） 256ページ

1．中央アジアへの関心

1991年12月にソ連邦が崩壊してそれを構成していた15の共和国が独立した主権国家となって以来，中央アジアの国ぐにがアジア社会の一員として急速に身近な存在となってきた。中央アジアの国ぐにのアジア回帰ないし新規参入は，アジア陸上競技会（1994年，広島）やサッカーのワールドカップ・アジア選手権をきっかけに親密の度を加えてきた。日本政府や経済界も中央アジアを新たな市場開拓や資源開発の対象として強い関心を示している。中央アジアへのＯＤＡ援助も進みアラル海の環境問題への技術協力もそのような動きの一環に位置づけられるかもしれない。

しかし，この地域に日本と日本人が関心を寄せるようになったのは90年代にはいってからのことであるかというと，かならずしもそうではない。それはおそらく「大東亜共栄圏」の時代にまで遡行することが可能である。日本版地政学が風靡しているさなかの1941年，たとえば松川二郎『中西アジア地政治誌』のような書物があらわされ，「『大東亜共栄圏』・・・は，環境的・即ち自然地理的に中央アジア，西部アジア，及び極北アジアと接續したものであると同時に，政治的・経済的將た又民族的にも，緊密・不可分の關係にあるものであり，・・・これらの一圓の地域は，大東亜共栄圏の『外廓』として，われわれは重大關心を持つものであり，持たねばならないところの『アジア』の構成部分である」(p. 2) とその関心を露骨に表明していることからも明らかである。

2．中央アジアの範囲

旧ソ連／ロシアの地理書ではこの地域は「カザフシタンと中央アジア」といい，カザフスタンは中央アジアには含めないのがふつうである。カザフスタンはロシア農民の開拓地，ロシア世界の南部ステップの続きの辺境と理解されているからであろう。

木村英亮（1979）でも「今日中央アジアには，ウズベク・タジク・トルクメン・キルギスの4連邦共和国があり，その北側にカザフ共和国があり」(p. 5)，「中央アジアとカザフスタンは，ソ連邦のヨーロッパ部分に匹敵する約400万平方キロの面積を占め」(p. 6) るとある。

しかし，本書ではカザフを含む旧ソ連中央アジア5か国をもって中央アジアとしているが，残念ながらそのような変化が必要となった背景に言及するところがない。

3．本書の目的と構成

本書の目的は「中央アジア近現代史の概略を示すこと」であるが，その意図するところは「中央アジアにとってソヴェト政権とは何であったか，現状をどうみればよいのか，今後どうなるのか」という問いにたいする，著者の見解をまとめたものであるという。

本書は，前著『スターリン民族政策の研究』(1993年) につぐ大作で5つの章からなるが，中央アジアを直接論じた前4章に本書の中心部分がある。

序　章　ロシアと中央アジア
第1章　ウズベキスタン
第2章　カザフスタン
第3章　中央アジアのロシア人
第4章　ソ連の結成とアゼルバイジャン
第5章　ロシア連邦内の二つの民族～チェチェン人とタタール人～

中央アジアにおけるソヴェト権力の形成期からソ連解体後の現代的問題まで，現代史家のバランスのとれた目配りで記述する本書は，まことに読みごたえがある。評者は本書を歴史記述とともに現代の地域的な諸問題を分析した地誌書として読んだ。

4．いくつかの問題

序章では，この地域におけるソヴェト政権の成立から現在までの主要なモメントが簡潔ながら要領よく描かれ，著者のこの地域に対する基本的なスタンスが理解できる。

「1924年民族的国家的境界区分」の評価の問題は，第1章でもよりくわしく論じられているが，

今日の中央アジア地域における国境や民族のわくぐみはこの区分に負うところが大きい。それまでの中央アジアにはトルケスタン，ホレズム，ブハラの3共和国とその北の旧ステップ総督管区があったが，この区分が「民族分布に関係なくおこなわれていた」ので，「民族的な紛争が避けられないばかりでなく」，「社会的・経済的に慣習の似た民族を単位として区分けすることが必要となった」(p. 41) ので，民族的な分布の調査結果にもとづきあらたに「交通や灌漑，その他地域の経済的利害を考えにいれて境界が引かれた」(p. 11) と肯定的な評価を下している。

従来の理解では，この民族的国家的境界区分はスターリンによる中央アジア地域に対する分割統治政策の一環であったというのが一般的であったが，教授は「民族別にいったん区分すること自体は必要であった」(p. 11) としている。フェルガナ盆地では人口が密集し民族的混住がすすんでいる地域では区分がむずかしい。タシケント周辺地域では，ウズベク人は都市部に集住するが農村部はカザフ人が圧倒的に多く，これをカザフスタンに編入するべきかウズベキスタンの領域とすべきか論議の的であった。

それ以前の問題として，中央アジア地域における「民族」の意味についてである。中央アジアはもともと「トルキスタン」として文化，宗教，帰属意識などでひとつのまとまった世界であり，全体としてトルコ系民族とムスリム文化という共通項でくくられていた。少なくとも1920年代までは，かれら自身がそれぞれ独自の民族意識をもち国民国家を形成するような存在と自覚していたわけではない。

中央アジアの一体性の維持を敵視したソヴェト政権の政治的意図から，かれらの民族的集団（「民族体」）が「民族」に昇格され民族共和国が組織されていった。そのことの意味が現在も問い続けられねばならない。西欧における「国民国家」モデルによって，ユーラシア各地の国家と民族をアナローガスに比定することの愚かしさについても，公平の立場からあらためて言及されるべきではなかろうか。

内容の詳細は読者自身で本書を手にとっていただくほかないが，中央アジアの地域研究の基本文献のひとつとして，大きな役割をはたすことを期待するものである。

参考文献

木村英亮・山本敏　(1979)：『ソ連現代史Ⅱ　中央アジア・シベリア』(世界現代史30)，山川出版社，319p.
松川二郎　(1941)：『中西アジア地政治誌』 新興亜出版部（東京市），486p.

山本　茂（法政大学地理学教室）

気象予報の物理学

二宮洸三 (1998)：オーム社　A5判 202ページ 3200円

本書は，気象庁長官まで勤められた御経験があり，現在は日本気象学会気象集誌編集理事をされている二宮洸三・東京大学気候システム研究センター客員教授による，気象予報をするための物理学の入門書である。

著者が本文中の「はじめ」にのところでも述べている様に，一般的な入門書•解説書では物理的な議論や物理法則の数式表現を避け，定性的な説明にとどまっていた。また予報士対策の本も，物理的理解よりも試験対策の文章暗記的な色彩が濃くみられた。物理的理解の基礎が不足したままでは，気象予報に関して本当に理解しているとはいえない。しかし，理解不足のまま，業務に従事している人々が少なくない。かくいう私自身も気象学を専門としておきながら，本格的専門書を読んで理解するのは難しく感じる事が多かった。本書では気象予報の物理についてだけでなく，それを理解するための基礎的数学についての解説から始まり，気象予報に用いる各物理法則に関する詳しい解説が非常にわかりやすく述べられている。今後，気象予報士を取得し，気象業務に携わるのを目指す人々だけでなく，気象学を研究する者にとっても，ぜひ読んでおくと良い1冊として紹介することにした。

まず第1章では，なぜ，このような基礎的物理学の知識が気象現象を理解するために必要なのかについて簡単に述べられている。とくに気象学の基本的な物理量の扱いについての様々な注意点が書かれているところは必見で，よく陥りやすい誤解について鋭い指摘がなされている。